

ESSAY いたずら

倉元信行

25

生きがい

部屋いっぱい好きな音を響かせ、汗をかきかきビールを飲みながら焼き物を作るというのは最高の時間である。こんな気分のいいものはない。

造ったものを人にあげて喜ばれたりすると、これはもう一石何鳥というのだろうか。

十数年来お世話になっている“まんてん星”という民宿が山梨県の清里にある。成田英士（ひでお）さんが経営するこの宿は何の変哲も無いところだが、雰囲気が家庭的でくつろげるのである。

子供たちが「清里に行こう」と言うと、それは“まんてん星”に行こうと催促しているのだ。

数年前に泊った時、小さな板にまんてん星と墨で書かれた看板が目にとまった。それほど飾り気の無いところなのである。「焼き物で看板を造ってみましょうか」

気軽に言ったものの、実際に取りかかったのは数ヶ月後の夏であった。

長さ70センチ程の信楽（しがらき）土の板を造り、次女も手伝って“まんてん星”の文字を浮かし彫りにしてみた。

本焼きはモミ灰を掛けて行い、文字と背景のところどころに金彩を施して看板は完成した。

さっそく車で届けたこの看板は、掛けてみると貫禄があっけななにか決まっている。右隅に彫った“信”の文字は私の名の一字だが、一緒に宿をやっているお母さんが“信さん”というのだそうで二重に喜ばれてしまった。

この信さんは焼きもの好きで、私の“志野のコーヒー碗”を愛用してくれている。

ここのロビーには、泊ったお客さんから送られてきたお礼の写真や手紙などがアルバムに貼って置かれているのだが、玄関で撮られた写真も多いから看板はこの中でも活躍している。

毎年行ってだんだん増えていく写真を見るのも私たちの楽しみのひとつなのである。

人に喜んでもらった時、人は生きがいを感じるのだと思う。仕事でも趣味でも口に出さなくても“ありがとう”という気持ちが伝わってくる時ほどうれしい事はない。そのために人は生きている。そういう時に人は燃える。

反対に、喜んでくれる人の無い行為とは何とむなしなものだろう。

アフガニスタンで長年医療活動を続け、多くの人の尊敬を集めている中村医師が講演会の中で、

「私自身は高邁な人間でもなんでもありません」と言いきった。

彼を動かしているのは貧しい現地の人々の感謝と喜びの顔であり、喜んで協力している多くの支援者の姿なのである。

江藤淳さんの自殺は衝撃的であった。

喜んでくれる一番の対象であった最愛の妻の死が江藤さんにとって決定的な出来事だったのかもしれない。平成11年、文春5月号の「妻と私」を読めばよく分かる。

しかし、江藤さんの言論によって勇気づけら

れてきた多くの支持者の声が、江藤さんの命を繋ぎ止められなかった事に、人はまた大きな衝撃を受けたのである。

私の手元に江藤さんの書かれた新聞の切り抜きが二編ある。

一つは東京工業大学の創立記念日に出会ったあのT.M.山崎さんの姿を記したものである。母校であるこの大学に山崎さんは5億円を越えるお金を研究費として寄付されていた。

『やがて挨拶に立った山崎氏の話しを聞いているうちに、胸のうちがひたひたと静かな感動で充たされて行くのを覚えて、私は何度もうなずいていた。そうだ、こういう生き方をしていれば、老害などというものの生じる余地はないのだと、私は声にならない声でつぶやいた』

『「死んでからお金を持っていて、仕方がありません。それよりも、今のうちに大学の研究の一助としてお役にたてたい。このお金を使ってよい研究が生まれればこんな嬉しいことはありません」と、山崎氏は淡々と語って、木村学長の手を借りながら壇演を降りた。同じ企業人とはいいながら、このところ新聞やテレビを賑わせている証券や銀行の幹部たちと比べると、何という違いだろう。これはものを造る企業と、ものを造らない企業との違いだろうか?』

少し省略を入れて引用した江藤さんの文章は続いて、研究の大事さと、中央教育審議会が出した「入学定員の一部に受験科目として英語を課さないことにも柔軟に対応」という答申に対する痛烈な批判へとつながっていく。

平成9年6月2日、産経新聞に連載の“月に一度”の論評である。

江藤さんの遺書の最後の一行。「乞う、諸君よ、これを諒とせられよ」

“みなさんが自分に期待しているということは解っているのだ、でも”

悲痛な叫びが聞こえてくる。

(完)



Illustrated by Kazumi Takagi & Special thanks for you.